バイエルン放送交響楽団 モーツァルトレクイエム レポート

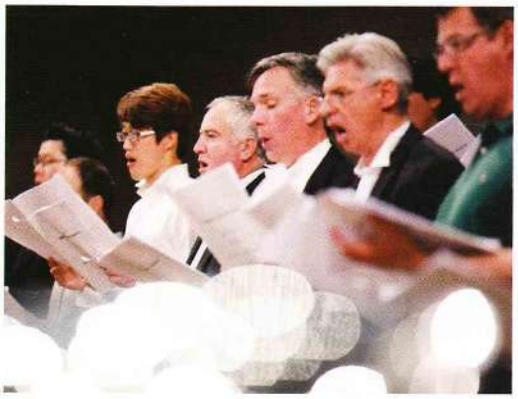
5月11、12日　ヘラクレスザール

取材・文:中 東生(音楽ジャーナリスト)

撮影:Astrid Ackermann

1949年に設立され、1965年に初来日したバイエルン放送交響楽団は、このところ2年ごとに来日しており、昨年11月の東京公演も記憶に新しい。一方、同合唱団は2012年のベートーヴェン交響曲全曲演奏会で来日しているが、レクイエムにおいては特に、彼らの卓越した表現力と、倍音に満ちた柔らかな響きが光るように思われる。現代ドイツを代表する作曲家のひとりであるヴォルフガング・リームのレクイエム世界初演やフォーレのレクイエムでも、ソリストを越えるほどの存在感を醸し出していたものだ。

今回はモーツァルトレクイエムの前にシェーンベルクの『ワルシャワの生き残り』が演奏されたため、結果的に特異な方向性を持つコンサートとなっていた。

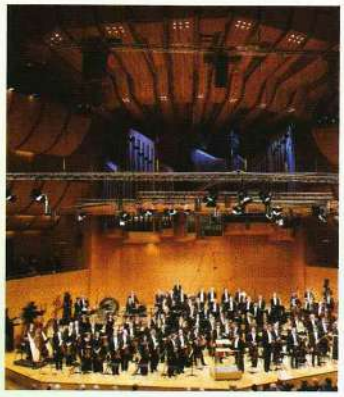


撮影:Peter Meisel

まず語り手のトーマス・クアストフは、まるで迫害によって身体障害者になったかのような錯覚を起こさせるほどの熱演だった。オーケストラは軍隊のラッパや殴打する音、うめき声などを描写しながらも、12音技法ということを忘れさせるほどの歌心を見せ、残酷ながらも美しい。最後に自然発生的に始まる男声合唱「シェマ・イスロエル」はガス室へ送り込まれるユダヤ人達の祈りなのだが、悲痛さよりも高尚さを感じさせ、悲惨な運命の中にも魂の救済が存在することを確信させるようだった。

休憩は挟まず、犠牲者たちへ黙祷を捧げる時間を意図的に聴衆に与えているかのようなゆっくりしたテンポで配置転換がなされた後、ようやくモーツァルトレクイエムが始まった。『ワルシャワの生き残り』の後すぐにベートーヴェンの『第九』やマーラーの『復活』を演奏し、ポジティブに終演させる試みもあるが、今回モーツァルトに望んだのは、ただ苦しみの中和だった。

オーケストラや合唱もそんな境地だったのかもしれない。イントロイトゥスが始まってしばらくすると、2003年より首席指揮者として彼らを導いてきたマリス・ヤンソンスは胸に手を当て、共感を示した。そこから音楽の流れがモーツァルトに集中され始めた。アダム・プラチェトカの、能天気に聴こえてしまうほどの美しいバリトンが悲劇の傍観者となった聴衆を慰めた。通常このような役回りはテノールに期待されることが多いが、今宵のテノールであるマーク・パドモアは今期のレジデンスアーティストであり、現在最高の福音史家のひとりにふさわしく、臨場感溢れる語り部のような歌い方に徹していた。ソプラノのゲニア・キューマイヤーは誇示欲のない端正な歌唱を聴かせ、メゾのエリザベス・クルマンは豊満な声で期待通りの「大物」感を漂わせた。〝Salva me〟で 弦にバトンタッチする旋律線や、〝Lacrimosa〟でppのままフレーズだけ膨らませる合唱は美しく、〝Amen〟の後、一瞬ヤンソンスが涙を拭ったようにも見えた。喜びに輝くような〝Sanctus〟や〝Osanna〟を経て、最後の和音が美しく響き終わると、拍手がパラパラと起こっただけでフリーズしてしまうという現象が起きたほど、聴衆を別世界にワープさせていたようだった。



撮影:Astrid Ackermann